

第4回

住み慣れた地域で誰もが いきいきと暮らせるまちづくり

共に学び、変化しながら、
「認知症になっても安心して暮らせる街づくり」を

瀧 山 嘉 久
布 村 明 彦*

発足までの経緯

平成20年10月、山梨大学に赴任した私は、最初に迎えた日曜日に朝から甲斐善光寺にお参りに行きました。すると防災無線で、「80歳くらいのごういう服装をした男性が行方不明になっています。心当たりのある方はお知らせください」といったメッセージが流れたのです。それを聞いて思いました。この地域には、認知症になったかもしれない誰々さんのことを周囲の人たちが気遣い、何かあったら支えてくれるコミュニティがあるのかもしれない、と。私にとっては印象深い出来事でした。

自治医科大学の卒業生である私は、大分県の山村で約10年間、地域医療・僻地医療に取り組みました。このときの経験から、地域医療をスムーズに進めるためには、行政としっかり連携しなければならぬということ学びました。

山梨に来てからも、県の健康増進課の後援を得て平成21年11月、「山梨神経難病セミナー」を立ち上げました。このセミナーは、医療・介護・福

社に関わる多職種の人々が、顔の見える関係”を築くことで、神経難病の患者さんとその家族を幅広くサポートしていこうというものです。

セミナーの発足に奔走していた平成21年9月、講師として招かれた甲府内科医会の講演会で、山梨県医師会の理事をされている篠原豊明先生から、認知症の会と一緒にやりませんか、というお誘いを受けました。長く神経難病の臨床と研究に従事してきた私にとって認知症は専門外。ただ、冒頭で紹介した防災無線の件が心に引っかかっていたこともあり、協力させていただくことにしました。翌平成22年2月、県の認知症の実態とその対策を教えていただくために、山梨県福祉保健部長寿社会課を訪ねました。このとき、当時の桐原篤課長から、認知症サポート医の支援が大変難しいと聞き、それなら行政とも手を取り合い、「山梨神経難病セミナー」の認知症版ができないかと考えたのです。これが「山梨認知症を考える会」発足のきっかけになりました。

多職種協働とご家族の目線

平成22年7月、「山梨認知症を考える会」の幹事会を開催しました。立场上、私が代表を務めてはいますが、認知症の臨床と研究を専門とする布村先生が中心となり、熱意を持って会を主導していただいています。

認知症の医療は、診断と治療で完結するものではありません。患者さんと家族の生活をいかに支えていくかが目標となります。したがって「山梨神経難病セミナー」と同様に、「山梨認知症を考える会」でも、保健・医療・介護・福祉に関わる多職種の方々がメンバーとなり、多角的なアプローチが可能な体制を組んでいます。

「山梨神経難病セミナー」と異なるのは、家族の会の方も幹事に名を連ねていることです。私は神経難病の患者さんとご家族に精神的に育てられたという思いがあるので、ご家族の方々との連携の重要性を実感しています。「山梨認知症を考える会」の幹事のみなさんも、ご家族の目線からのお話をとても新鮮に受け止められているようです。

他の先生方も書かれていますように、山梨県内にも笛吹市のように先進的な取り組みをしている地域があります。同市の許山 厚先生のお話に触発されるかたちで、他の地域の認知症サポート医の先生方もリーダーあるいはコーディネーターとして意欲的な活動を始めています。共に学び合い、全体のレベルを高めていくというのが、当会のスタイルと言えるでしょう。

私自身もちろん学んでいます。第2回および第3回「山梨認知症を考える会」の講師をそれぞれ引き受けていただいた池田 学先生(熊本大学)と八森 淳先生(市立伊東市民病院)からは、人材育成の重要性と、多職種カンファレンスの意義、そしてリーダーとしての熱い心を学びました。私自身も変化しています。

(瀧山嘉久)

「山梨認知症を考える会」の活動

— 認知症サポート医支援にフォーカス！ —
「山梨認知症を考える会」の活動について、発

足から現在までの歩みをご紹介します。当会は、平成22年7月に8人の幹事、すなわち山梨大学神経内科教授、同准教授、同精神科准教授、同健康・生活支援看護学講座教授、甲府脳神経外科病院院長(山梨県医師会理事)、日下部記念病院(精神科/認知症疾患医療センター設置)院長、認知症の人と家族の会山梨県支部代表世話人、および山梨県福祉保健部長寿社会課課長が会して発足しました。第2回、第3回と幹事会を重ねる中で、デイスカッターとして県内の認知症サポート医、認知症患者入院治療施設となる精神科病院院長、地域包括支援センター保健師、すでに認知症モデル地域支援体制構築推進事業が展開されていた山梨市介護保険課職員らを招き、当会が重点的に取り組むべき課題を絞り込みました。

その結果、地域における認知症医療・介護の連携役として重要な役割を担う「認知症サポート医」(図)を当会が支援する、という初期活動の方向性が定まりました。認知症サポート医に関しては、全国的にもその活動に個人差や地域差が存在する

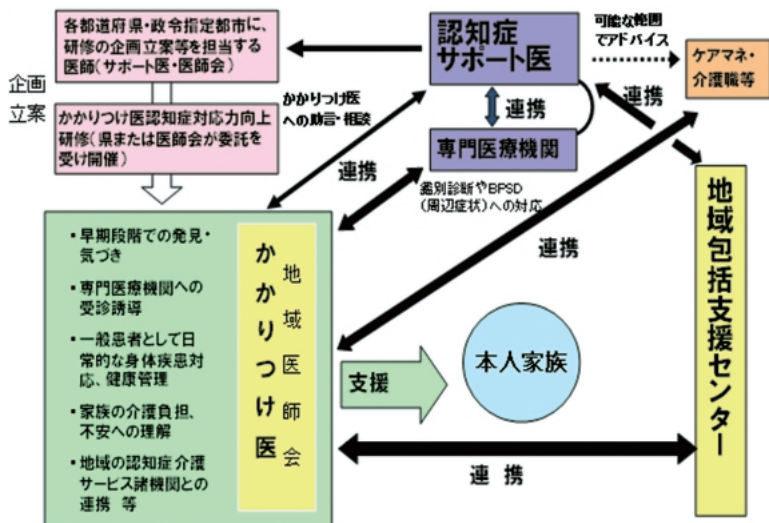
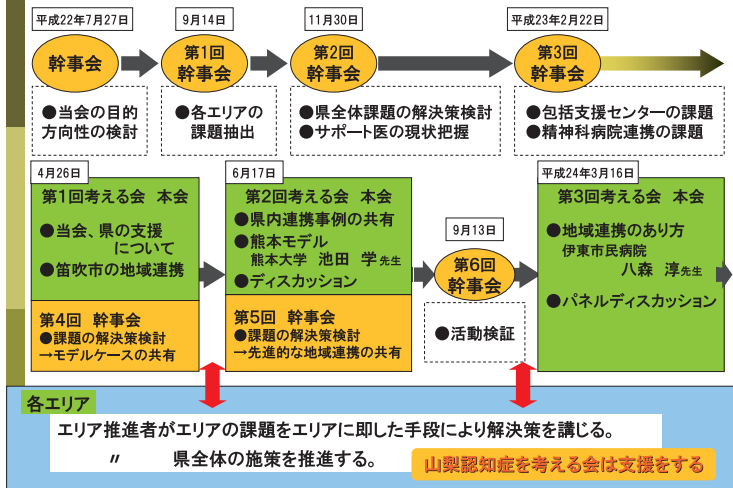


図. かかりつけ医・サポート医が参画した地域における認知症高齢者支援体制¹⁾

ことが指摘されています。当会発足当時に16人養成されていた県内の認知症サポート医を当会がバックアップすることで、県全体の認知症地域支援体制の確立に寄与したい、と考えたのです。

そこで、平成23年4月第1回の当会では、参加メンバーを認知症サポート医と各認知症サポート医が指名する地域連携のキーパーソン（地域包括支援センター職員など）に限定し、すでに先進的に活動されていた笛吹市医師会会長（認知症サポート医）に講演していただきました。続いて開催された同年6月の第2回および平成24年3月の第3回の当会では、それぞれ池田 学先生（熊本大学）、八森 淳先生（市立伊東市民病院）を特別講演演者に迎え、地域連携モデルの実際をご教示いただき、認知症サポート医とその連携者のモチベーションを高める働きかけを繰り返し返しました。また、特別講演者にコメントターになっていた

山梨認知症を考える会のあゆみ



だき、県内の認知症サポート医、保健師、行政担当者、家族会代表らが登壇してパネルディスカッションも行い、講演内容を身近に引き寄せられるように計らいました。

これら当会の活動は、実際に県内認知症サポート医の地域活動の活性化に直結し、当初の期待が現実となる様子を目の当たりにできた喜びは大きなものでした。今後、初期活動の成果をさらに推し進めて、県内各地域で認知症サポート医、かかりつけ医、専門医の間に循環的連携の流れが確実に形成されていくことを目指し、活動を継続していきたいと考えています。

文献

1)厚生労働省ホームページ 認知症サポート医・かかりつけ医 <http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/dementia/401.html>

山梨県では認知症の人とそのご家族を支えるため、地域に根差した「山梨認知症を考える会」を立ち上げています。

今回はメンバーの方からインタビュー形式にて、当会の発足によって変化したこと、今後の展望について、おうかがいしました。

各地域認知症サポート医、家族の会、行政の声

◇篠原豊明

甲府脳神経外科病院 院長

(山梨県医師会理事・中北地域

認知症サポート医)

私は、脳神経外科専門医で、かつ認知症サポート医であります。平成23年3月より新しい認知症治療薬が登場したため、認知症サポート医としてその使用経験を医師向け講演会で3〜4回、発表してきました。また、50〜60人の市民を対象に小講演会を7〜8回行って、認知症の啓発活動を行いました。今後は、行政とタイアップして、認知症患者さんと家族の支援を念頭においた講演会や相談会を開いて、明日にも役立つ活動を行いたいと思います。

◇久保田正春

目下部記念病院 院長

(認知症疾患医療センター・峡東地域

認知症サポート医)

「山梨認知症を考える会」の会合で他の先生方と顔を合わせると、自分たちの患者さんの話になります。会話を通してお互いに何ができるかがわかり、実際に患者さんを紹介し合うことでさらに信頼関係が深まっている印象です。そうした仲間が、特に若い仲間が、会の活動によって増えることを願っています。

また、会を牽引する山梨大学の先生方から学問的なサポートをいただけることも、医療の質の向上という面で非常に貴重です。

◇許山 厚

境川診療所 院長

(笛吹市医師会会長・峡東地域

認知症サポート医)

認知症サポート医が孤軍奮闘し、一人で悩んで

いるようでは、地域のニーズに適うアイデアも行動も生まれません。他の認知症サポート医や医師会の先生方の力を集めることが大切です。

「山梨認知症を考える会」の第1回幹事会で笛吹市の活動をご紹介したところ、富士吉田や峡南の先生方が興味を持ち、講師に招いてくださいました。互いの活動を知り、課題を共有し、みんなで解決策を考える。そのような連携がすでに始まっています。

◇長田忠孝

飯富病院 院長

（峡南地域 認知症サポート医）

人口減少、家族形態の崩壊、認知症といった地域が抱える問題に日々直面しています。地域の実情を前に、われわれ医師に何ができるのか、それがまさに認知症サポート医の活動だと思えます。

認知症の方が地域に住み続けられるように、医師、地域包括支援センター、民生委員など地域の人々を結ぶネットワークを構築する、読書会や症

例検討会を開く、そうした活動の醍醐味を、「山梨認知症を考える会」の方々と話し合っています。

◇渡辺高祥

中央病院 院長

（富士・東部地域 認知症サポート医）

認知症サポート医になって、具体的に何をしていいかわからないまま、1年が経過した平成22年に「山梨認知症を考える会」に参加させていただきました。そのとき、笛吹市医師会の許山先生の認知症に対する取り組みをうかがい感銘を受けました。先生に富士吉田医師会学術講演会でご講演をしていただき、これをきっかけに、本年4月に医療・行政・介護・家族の会の代表で構成する「認知症勉強会」が発足いたしました。今後の課題として、笛吹市医師会をお手本として、かかりつけ医と専門医、専門医療機関との連携の構築を図っていきたいと思います。このようなきっかけを与えていただいた「山梨認知症を考える会」に感謝いたします。

◇小俣二也

富士厚生クリニック 院長

(山梨県医師会理事(介護保険担当)・)

富士・東部地域 認知症サポーター医)

認知症サポーター医が地域で中心的な役割を果たすためには、地域包括支援センターとの連携が不可欠です。互いの専門機能をいかに活用し、いかに質を高め合っていくかということを、今一度考えてみるべきではないでしょうか。

「山梨認知症を考える会」には、県や市の行政の方々も積極的に参画されています。この会を通して、認知症サポーター医の機能をより活かすための環境づくりが、検討・実現されていくことを期待します。

◇平井出設子

認知症の人と家族の会 山梨県支部

今まで、認知症サポーター医とは『認知症について何か力になってくださる医師』という漠然とした受け止め方をしていました。ある一人の認知症

サポーター医が、専門医による研修の場で認知症について開眼されたことを吐露なされました。それは感動的であり、喜びでした。患者および家族は、地域で受診しやすい「かかりつけ医」が一人でも多く増えることを当会の活動と認知症サポーター医の先生方に期待しています。

◇布施智樹

山梨県福祉保健部長寿社会課 課長

「山梨認知症を考える会」の自発的な取り組みにより、認知症サポーター医を中心として、認知症の人と家族の支援に携わる多職種の方々の有機的な連携について、考え、実践するきっかけが提供され、各地域に取り組みが広がってきています。

山梨県としても、参加者の熱意ある取り組みにより、各地域の連携がますます広く、強固になるとともに、行政の認知症対策等とも相まって、認知症になっても安心して暮らせるまちづくりが推進されることを期待しています。

次号予告 612号 (2012年9・10月号) (敬称略)

特集: COPD 慢性閉塞性肺疾患 (慢性気管支炎、肺気腫)

呼吸器内科学における COPD の現状 順天堂大学 福地義之助
病態

COPD の疾患概念と定義 東京女子医科大学 永井厚志
COPD の自然歴～北海道 COPD コホート研究から～

北海道大学 西村正治

COPD の病因～その多様性と対策～ 東北大学 一ノ瀬正和

COPD の病態生理～末梢気道と気腫病変～ 東京大学 長瀬隆英

全身性炎症と併存疾患 鹿児島大学 井上博雅

診断

COPD のスクリーニング 問診と身体所見
日本医科大学呼吸ケアクリニック 木田厚瑞

COPD の画像診断の進歩 京都大学 三嶋理晃

スパイロメトリーの使い方: 肺年齢は?
東京女子医科大学東医療センター 山口佳寿博

安静換気のできる呼吸機能評価 (IOS) 東北大学 黒澤 一

喘息との鑑別のポイント 日本大学 橋本 修

肺線維症・肺気腫合併例の診断・治療・評価

大阪市立大学 平田一人

肺がん合併 COPD の診断・治療・評価 順天堂大学 高橋和久

循環器疾患と COPD ながや内科 永谷憲蔵

治療

COPD における肺循環障害の考え方と対策 千葉大学 巽 浩一郎

治療薬: 長時間作用性抗コリン薬の位置付け 信州大学 久保恵嗣

治療薬: 長時間作用性 β_2 刺激薬の位置付け

東海大学医学部付属東京病院 桑平一郎

治療薬: 吸入ステロイド・

長時間作用性 β_2 刺激薬配合剤の位置付け

岩手医科大学 山内広平

治療薬: テオフィリンの新展開 (少量投与)

国立病院機構 東京病院 大田 健

管理

呼吸リハビリテーションの有用性 順天堂大学 植木 純

急性増悪の予防と対応 奈良県立医科大学 木村 弘

COPD における健康関連 QOL の評価をめぐる

St. George's Hospital Medical School 西村浩一

吸入指導のコツとピットフォール 東濃中央クリニック 大林浩幸

COPD 管理におけるかかりつけ医の役割

広島アレルギー呼吸器クリニック 保澤総一郎

COPD の地域連携 霧ヶ丘つだ病院 津田 徹

共に学び、変化しながら、「認知症になっても
安心して暮らせる街づくり」という本会の目的に、
一步一步近づいていきたいと考えています。

(山梨大学大学院医学工学総合研究部
神経内科学講座 教授、

山梨認知症を考える会 代表)

(山梨大学大学院医学工学総合研究部
精神神経医学・臨床倫理学講座 准教授)